

大正九年十月廿三日印刷
大正九年十月廿五日發行

編輯人 安井善正
發行所 西筑摩郡島三三九番地 書局
印刷人 長野縣松本市小柳町八十五番地 吉藏
印刷所 所 活版所

【定價金參錢】



目次

- 一つの言葉
- 苗木開引に就て 西澤生
- 公有林野官行造林法 施行令
- 時と所とを誤る勿れ 刺紅生
- 過去帳 淳城生
- 蕪那登山 溪月生
- 北海道通信
- 榮報 日日生

大正九年十月廿五日 第百三十二號 每半月五日發行 治明四十四年六月十四日 第三種郵便物認可

一つの言葉

ほんとうに夜が明け離れたような気分になつて見たい、はち切れさうな希望と透徹した清新さに満ちた黎明の氣に魂のどん底から痛い程觸れてゆきたい、それは次の能動と活躍とを意味するものに外ならない、日は輝く、さんらんとしてこの地上のあらゆるものに偉大なる力と愛を示しながら輝き渡る、光りは深い恵みの象徴であつた殊に其れは常に新しく將又強く生き行くものに取つてさうではなかつたか

舊きおほかたものは頽廢する、そして滅びてゆく、俺達の堪へられないものはやがて血液の循環を阻む動脈硬化にも似たる安易なる満足である、俺達の脈管にまつ赤な血液が波打つて居る限り、血球の一つ一つが其の生命を失はない限りあらゆる退歩とすぐに醗酵する停滯の存在を拒否する、前へ——さうだ、進む事に依つてのみ俺達は眞に生かされるんだ、雑誌を作り上げる事は立派な一つの創作に外ならぬものである、汗みどろの雑多な苦しみも惱みの中から産み出した雑誌が未成品であればある程〇達は自己の力を顧みる、小じんまりした完成は納り込みを意味する、さんざ苦しんだ後の出来損ひである事が何で恥しいことであらうぞ、俺等は新しい雑誌を手にする時果して其れが眞に自己のものであると思ひ得るか、それが他人の物であるが如く感ずる事の寂しいことよ、完全なる把握を希求するものはこの粗末な紙上に印せられた活字の各々にお前の姿を明かに表現して呉れる事だ、それが爲には吾等にも夜明けがなくてはならない、偉大にして尊嚴なる太陽の出現があらねばならぬ。

先の人々が作り出して呉れた道はあり難いものであつた、けれど、けれど俺達は推移する時代と共に歩まねばならぬ、先蹤が示した創造の努力の上に更に一步を踏み出して眞なる吾々自身の世界を作らねばならない、執拗な因襲の束縛と威壓を畏怖してはゐられなくなつた、新たな建設へ——吾等は辿る、そして「い、雑誌」をみんなの前に送り出さん事に努力しなくてはならない「これを賞めて呉れ」と心から要求する日の来るまで。

苗木の間引に就て

西澤生

苗圃に於て苗木を保護入手するのは山地へ補付前の苗木に十分なる生長區域と光線とを與へ其の發育を完全ならしめ且つ其の根を丈夫ならしむる爲めである然るに養苗者の實際の従業を見るに散播に對する播種量が過度又之を間引くにも發芽せる苗木を惜み其れが爲め苗木の發育を不良にし或は善良の苗木類を滅じ又苗木軟柔に育ち病虫害に罹り易く且又品質をも劣等ならしむるに至るも之れを顧みざる者あるは斯業の爲めに大に憂ふる所を以て本題につき聊か卑見を述べらば

先づ間引と云ふは種子より密生したる苗木中より其の一部を苗木と苗木との間に適當の距離をなせしめて残れる苗木の發育を充分ならしむるにあり此手入れは播種後に於ける第一着の手入である亦間引は選種の目的をも兼ねて達し得るのであるそれで先づ豫め多くの種子を蒔き下して發生後に間引く事あるを普通とするも又時として間引は只密に播かれし所にのみ行ふでは無くして下種の誤を正す爲にも行はるゝものである然らば特に間引の際に注意を要すべき事柄を擧ぐれば

一、間引は其の適當期を失せざる事肝要である若し時期を失すれば苗木密生して日光不足の境遇にありし結果其の苗木は徒らに伸長して柔軟なるの弊ある此故に苗木の發生後良否を見分け得る程度に到れば徐々に間引を行ふを良とす

一、成るべく其の性状質の宜しからざるものを除き斯様にして良苗を残すのである然し苗木相互の間隔を考へ其の巨離適當ならざる時には良苗木と雖も用捨なく抜き取り又悪しき苗木にても場合に依れば残さなければならん事がある

一、間引は之を一度に強行ふ事なくして幾回にも分ちて行ふを良とす先づ少しの間引き次後數日を隔て、行ひ漸次に疎するのである然るに若し誤つて一度に強度の間引を行ひたる時は急に日光の直射等を受け適當なる距離なるのも一本枯死したる時には之が爲め疎に過ぎるの憂ある故に間引の度は其の苗木の枝端互に相觸れざるに至れば可なりとす

一、間引の際は苗木を抜き取るに成るべく廣く土壤を動かさざる事に注意を要す之れ廣く土壤を動かす時は残れる苗木をして根を損傷する事ある又間引は之が爲め其の適當の期を選び未だ根の十分に廣がざる前に行ふを良とす

一、土地の適潤にして苗木の伸長盛んなる時は強度の間引を良とす

一、雜草の生じ易き土地は成るべく間引を弱くし又は中止するを良とす

以上如く適當の時期に於て適當の度に行ふにあらざれば苗木は次第に生長するや生存競争の爲めに他を壓する所の優木と他に壓せらるゝ所の劣木とを生じ遂に劣木は枯死するか或は見込なきものに變じ優木はますます生長盛なるに到るを以て斯かる自然淘汰に先ちて人為を以て之を防ぎ苗木の發育を助け樹形を宜くし成るべく各苗木をして平等の發達を遂げしむる様に養苗者は常に留意すべき事肝要ならんと思ふ(完)



公有林野官行造林法施行令

刺令第四百二十六號大正九年九月二十五日

- 公有林野官行造林法施行令
- 第一條 國は造林地の植樹補植手入防火線の設備其の他造林に必要な行為を爲す
 - 第二條 公共團體は造林地保護の爲左の事項を行ふの義務を負ふ
 - 一 火災の豫防及消防
 - 二 盜伐誤伐侵墾其の他の加害行為の豫防及防止
 - 三 有害鳥獸の驅除
 - 四 境界標其の他の標識の保存
 - 五 大林區署長の指定に依り看守人を配置すること
 - 第三條 公共團體は左の產物を採取することを得

附 則

本令は公有林野官行造林法施行の日より之を施行す

公有林野官行造林法施行規則

農商務省令第二十二號大正九年九月三十日

公有林野官行造林法施行規則左の通定す

- 第一條 造林契約を締結せしむるときは大林區署長は地方長官と協議の上造林箇所植栽樹種契約の存続期間及收益分収の歩合を定め公共團體に之を提示すべし
- 第二條 造林契約成立したるときは大林區署長は公共團體と共に造林契約書を作り雙方署名捺印して各一通を領收し置くべし
- 第三條 大林區署には別記様式に依る公有林野官行造林地臺帳を備ふべし
- 公有林野官行造林地臺帳には左の事項を記載すべし
 - 一 記入番號
 - 二 造林地の所在
 - 三 造林地の面積
 - 四 公共團體の名稱
 - 五 契約の年月日
 - 六 地上權發記年月日及番號
 - 七 存続期間
 - 八 收益分収の歩合
 - 九 公共團體の所有として造林地に存置する樹木の種類及本數
 - 十 權利の處分及其の事由

國有林野臺帳規程及國有林野臺帳及圖面本抄本下付規程は公有林野官行造林地臺帳

一 下草落葉及落枝

二 樹實及菌草の類

三 手入の爲伐除する枚條の類

四 植樹後二十年内に於て手入のため伐採する樹木

第四條 造林著手後天然に生したる樹木は之を造林契約に依る造林に係る樹木と共に生育せしむるもの亦同じ

第五條 根採は別段の契約ある場合を除く外公共團體の所有とす

第六條 造林地の收益分収の歩合は國及公共團體各十分の五を標準とし地代造林費其の他造林契約の實行に要する費用を參酌して之を定む

第七條 造林地の收益分収は其の樹木の賣拂代金を以て之を爲す但し大林區署長に於て特別の事由ありと認むるときは材積を以て之を爲すことを得

第八條 賣拂代金を以て收益分収を爲す場合於ける樹木の賣拂及材積を以て收益分収を爲す場合に於ける收分樹木の指定は當該官廳之を行ふ

第九條 造林に係る樹木に關し第三者より受けたる賠償金其他の金額は其の請求に要したる費用を控除し收益分収の歩合により之を分収す

第十條 公共團體造林地の土石を處分せむるときは當該官廳の承認を受くべし

第十一條 公用若しくは公共事業のため必要あるときは造林地の經費に支障なきと

きは當該官廳は造林地を貸付し又は使用せしむることを得

前項の場合に於ける貸付料又は使用料は公共團體の收入とす

第十二條 左の場合に於ては大林區署長は造林契約の全部又は一部を解除することを得

- 一 公用又は公益事業の爲必要あるとき
- 二 公共團體自ら造林地の經營を爲さむとする場合に於て經營の能力確實なりと認めるとき
- 三 契約の目的を達すること能はずと認めるとき
- 四 公共團體造林地又は造林に係る樹木の持分を處分したるとき
- 五 造林地を林野以外の用途に供すべき特別の必要あるとき

第十三條 前條の規定に依り契約を解除したるときは直に收益分収を爲す

前條第二號又は第四條の規定により契約を解除したる場合に於ては公共團體は大林區署長の指定に従ひ造林に係る樹木に付國の有する持分の價額に相當する金額を納付すべし但し其の金額が造林の爲國の支出したる金額と之に對する重利計算に依る年五分の利息に相等する金額との合算額に達せざるときは其の合算額を納付すべし

公共團體前項の規定に依る金額納付したるときは造林に係る樹木に付國の有する權利を取得す

に關し之を準用す
第四條 造林地の施業計畫を定めたるときは大林區署長は之を公共團體に通知すべし之を變更したるとき亦同じ

第五條 公共團體は造林地の保護及産物の採取に付當該官廳の指揮に従ふべし

第六條 公共團體は造林地の保護及産物の採取に關し規定を設け大林區署長の承認を受くべし之を變更するとき亦同じ

第七條 造林地に火災又は盜伐あるときは公共團體は直に其の防止に必要な措置を執り其の旨當該官廳に届出つべし造林地の附近に火災發生し造林地を害するの虞あるとき亦同じ

造林地若し其の樹木に異狀を生したるとき又は造林地の附近に病虫害其の他の異狀を生し造林地に被害を及ぼすの虞あるときは公共團體は其の旨當該官廳に届出つべし
第八條 公共團體造林地に看守人を置きたるときは其の住所氏名を當該官廳に届出つべし

第九條 公共團體は當該官廳の承認を受け造林地を使用することを得

第十條 公共團體造林地又は樹木の特分の處分に付承認を受けむとするときは相手方と連署連印の上願書を大林區署長に提出すべし

第十一條 造林地の地上權に關する登記は大林區署長之を囑託すべし
第十二條 國有林野法施行規則第五章明治

三十八年農商務省令第二十八號明治三十八年農商務省令第三十六號明治三十九年農商務省令第二十五號國有林野産物賣拂規則及國有林野産物極印規則は公有林野官行造林地に關し之を準用す
附則 本令は公有林野官行造林法施行の日より之を施行す



時と處
を
誤る勿れ

刺紅生

時と處を考へずして猪突猛進するは青年血氣の弊なり、疾風迅雷の急を要する場合と雖も時と處を斷じて誤らざるの用意はなかる可からず、紫電一閃名刀の一振も時と處を得ざれば暴漢の誇りを受け罪人となりて擯折せらるる之に反し鈍刀の一割もよく時と處を得れば勇者となり勳爵の榮を得て勇人の尊榮を享く事敗れて後悔ゆるは迂にして失敗を豫知するは賢なり、これ一にして時と處を考ふるの足らざるを否に依る事故に賢なるは事に先んじて時と處との正否を斷するの思慮あるに若かざるなり、この側は遠く古に遡り東西に奔走して求むるを要せず蒸騰の中に顯著なるもの處々ある

を見る、かの豪傑大西郷も一朝時と處とを誤りしため賊名を冠せられて、あわれ、漸く瀝滲條たる秋風を恨みつ、城山の露と消へ果てしにあらすや、日本海の大激戦に於て空前の大捷を得たる東郷大將もよく時と處とを斷するの明ありしによりこの勝を制したるは人の知る所なり
然らば吾人は如何にす可きか乃ち常に如何なる時に生き如何なる所に生活しつ、あるかと深く腦裏に銘じ之を標準として身邊に聚り来る萬般の事物ははかれ
然る時は輕薄なる風潮に染みて社會より葬り去らるゝ事もなく益々理想の光明に接近するを得可きなり
吁 前途爲すあらんとするの青年
ゆめ時と處とを誤る勿れ(九、一〇、三)

その時

草山芥平

夕いたく疲れてあふく校門の向の山は冬枯れにけり
夕山に風あるならむ白々と尾花が來ればふしなびく見ゆ
道の土の草の下なる水の音したしく聞かゆ朝山を行きつ
丈け高く生ひ重れば秋草の下ゆく水はともしく聞ゆ
あかどきを人ほきたらむ山深に道の秋草は續きたり

過去帳

淳城生



(九) 夏季の事業も一先片づいたし明日から町に歸らうと思つて居ると、「神伐林造の新設に要する用材をどれ」といふ出張命令がやつて來た。翌日は思ひけない雨降りて野も山も五寸の下に埋つて居るが書過ぎから初雪を踏みつけながら三里の道を中川村の高野といふ處に辿りつく、この高野に新しい苗圃を作るといふので約三町この面積は皆根倒しにして居る。その中から設計書に適合する様なものを見出して造林するの頗る面倒な仕事だ。おまけにそこに居る十日の間は毎日雨に、風に、たまに寒が降つて寒いこと冬の準備をしてないおれは宿の主人の大きな外套をかりて着て變な格好して現場に出て居た。

(十)

思出多い今年も暮れて、異郷に於ける初めての正月を迎へた、田舎の町なので、大方は舊正月をするので新の正月といつても淋しいものであつたけれども兎に角印象の深い年を迎へた。その頃には俺達の家庭である花塲館には、林區署のものでは、大分縣から來た男と、新潟縣の男と、俺と三人だけであつたが。外に縣廳の土木の出張員

か四五人居たけれども年末には皆縣廳に引揚げて仕舞つた。宿屋で年を迎へたのは俺達三人でした。年末の休みになつてから仕事もないのだから、碁盤を引張り出したり將棋盤を持ち出したりして下宿屋の二階で遊んで居た。その間には署長の林學士を訪れたり、次席の技手の家庭を訪ねたりして「奥様どうぞコーヒーを一杯」など、遠慮ない事を云つたりした

(十一)

雨

灰色の空からは絶えず降つてくる。シベリヤの冬を思ひ出すやうな日が幾日も續く。雪に閉し込められた北國の冬程惨めなものはない。然し俺達の活動の時期はこれからなのだ。夏の中に伐り貯へられた丸太をこの雪を利用して處々の場所まで運搬するのだ。正月の四日の日に、マントを頭から被つて吹雪の中を又院内の山へと急いだ。夏の中に切つた二万何千石といふ丸太は雪の中に三里先の玉川の川邊まで運ぶのだから容易でない。山地の方はバツ橋若しくは四ツ橋で運搬し中継ぎ場から普通の橋(金打橋とも云ふ)で最終の上場まで運ぶ。雪中の運搬は天候に支配されることが多い。折角い、道になつたのが一夜の吹雪で目茶苦茶に道を埋められたりして真に泣きたい様なことが度々ある。道のい、時は一人で六石も運搬するものが道が悪くなれば、大男二人で一石の運搬も至難である。天候の如

何は運材費の大小に恐しい關係のあるものだが、今年には充分の經費があると思つて居ても天候の如何では、目的がガラリと外れて經費が不足することがあると思へば、今年には經費が不足だから困つたものだと思ふと天候がよくての經費の範圍内で出来上つたりすることがある位豫測の出来難いものである。橋運材に限らず木材の如き重量のあるものは、運材費を多く用する。従つて木材の費用は運材費が比較的多く占めて居る事は争はれない、請負人も儲かるも損するも運材一つだと云つて居る位である。橋出しとか、提出しとか、筏流しとかいふ原始的な方法をやめて、科學を利用した機關を利用する様にならなければ日本の林業も駄目だ。人夫の頭数は三百人も居る。それに毎日の功程を夜の中に調べ上げて翌日は賃金を渡してやるのだから随分忙かしい二月の終りから三月の初にかけて二週間ばかりは、ロク／＼床に入つたこともなく、夜具を破つて机の前に仮寐したものだ。かうした忙しい生涯を續けて土場に運搬され、高級別に綺麗に積み上げられた所を見ると今までの疲れも忘れて大きな心の満足を感じる。最後まで使つて居た小屋司や山頭などを引張り出して、巻立の上で紀念の撮影をして小林區署に引揚げたのは三月十三日であつた。御苦勞様でしたと署長の言葉をきいて去年の六月以來の疲れが一時に覺えた様な氣がした。

(十二) 大正三年三月十五日の時であつた。強首村を中心とした附近一帯に大地震があつて、家屋の倒壊、人畜の死傷實にその惨を極めた。俺の居るK町は被害は余りに少なかつたけれど、土壁の落ちたものは数ふるに違なき有様であつた。折角運材して巻立てた杉の丸太も、その巻立てが散々に崩れて仕舞つた。同僚のものは未だ出張先から歸らず、自分獨り下宿屋の二階に居たが、地震といふ事を心の中に去覺してから表に出るまでは、何が何だかサツパリ分らない。寐巻一枚の儘素足で表へ飛出して仕舞つたゴウ〜と山の方で物凄いやうな震ひがふと、家も倉もヒツクリ返るやうな震ひが来る。それが絶間もなく揺れて来る。その度に脊中に水を掛けられた様にゾツとするお役署に行つても、震れてくると仕事の手をやめて顔を見合せる。次の日も及次の日も一寸も止めずに震れるし、空は低く怪しい雲に覆はれて居るし、何時大きな地震が来るやらと人心は實に競々としたものであつた。殊に附近には丁湖といふ陥落に依つて出来た湖があり、その東北には駒ヶ岳といふ休火山があり、そしてそこら一帯は幾多の温泉が湧出して居る地なのである、その上に明治二十九年に大きな地震に見舞はれた経験があるのだから、毎日不安の日を送るのも無理ない事であつた。一週間位は洗湯屋に一人も浴客がなかつた云へば、裸

体のま、潰されることを厭ふた爲だろ。發電所が崩壊して送電が不可能になつたので、ランプの使用は危険といふのでロインクの賣行が俄に増したと云ふ事であつた。三月十六日に不安の念にかられた、公用の爲に町に用て来て見ると、裁判所とか、警察署とか郡役所とか大きな建物は殊の外害を蒙り見る目も氣の毒の至りであつた。五町も六町も地隙が出来て居るから泥を吹出したたり、鐵道線路が打飛ばされて居る所を見ると、真に自然力の偉大なるに驚かざるを得なかつた。この地震についても哀れな話を聞き知つて居るが俺の過去帖には余りに横道に這入るから書く事をやめる。

(十三) 身体の強健は著しく増進し筋肉の發達も隆々としたもので、私に微笑する様な事は度々あつたけれども四月の下旬に病魔の襲ふ所となつて、者長の進めに依つて入院する事になつた。その病院は同氏の友人の經營する病院で、万事都合のいい、世話の許に養生することが出来た。病院生活は今度で三度目であるが、最初は姉が付き添ふて居て呉れたし、二度目は郷里の病院だつたので誰彼れどなく来て慰めてくれたからよかつたけれども、今度はほんとに一人ポツチの入院で淋しい日を経た。幸に病勢は日毎に減退して入院して二週間位には散歩のため外出を許さるやうになつた。その頃隣の室にその町の藝者で年増の一人が入院して居たが、隣り合ひなので心やすくなつてよく話をしたが、うんな粹な家業をして居るものに似合はないシツカリ者で、悪い遊びをするものではないと繰返し言つてきかして呉れた。そして本人は弟を東京の専門學校に學ばせる爲に苦界に身を投じて居るときいては、藝者ではあるが敬意を拂はずには居られなかつた。それから年は幾度か積り替つて大正八年の三月、其の町の劇場でヒョウトリその女に出遇つた。その時は己に藝者ではなく弟の卒業後弟の母とも姉とも妻ともなつて力を助けて居たが大正七年の秋弟も結婚したので、自分も人妻となり、今は幸福に暮して居ると云ふのであつた。

(十四) 大正三年七月歐州大戰の序幕は切つて落された。日獨國交は斷絶して、戦雲は低く山東の野を覆ふた。俺はその年の九月増設になつたB小林區署へ轉任を命ぜられた。K林學士に別れ、俺達の楽しい家庭である花塲館に別れ、住み馴れたK町を後にして五里の奥のB村に行くことは余りに悲しかつた。然し行かぬ譯には參らない。獨り者の氣樂さは運び物あるでなし、讀書好きの俺は書籍だけは可なり澤山持つて居たけれども、別してそう持つて居たといふ譯でない九月十日には無然まだ應舎もないB村へと真先に乗り込んだ。應舎がなかつたので農家を借りて事務室に充て、居たが色々な不

便も感した。その村に初めて出来たお役署であつたので、村の人察からはより多くの好意を以て迎へられ、片田舎ではあるが、都合に愉快な日を送つた。こゝからはO停車場まで十里、隣縣のM市までも大きな峠を越えて十里の行程であつた。B村の西北に丁湖といふ周三里位の湖があつた。辰子湖とも云つて面白い傳説のある湖であつた。水が非常に綺麗で、恐ろしく深いそうで、船に乗つても何となく嫌な氣がした。夏から秋にかけて遊覧者が相當にあつて、B村の旅館三軒共いつも客の絶えた事はない位であつた。Tといふ所の農林學校を出た男と共に、農家の一室を借りて白炊生活を初めた。春の病氣の痕も忘れた様に、体は益々丈夫になつてきた。お役所をひけてからは、小學校に行つてテニスをやつたりして面白く暮して居た。仙臺の某中學を出た男が文官試験に應ずるといつて盛に勉強して居た時分て俺達も毎日講義録を讀み更つた。

(十五) 二度目の冬は來た。四年の一月からは稀代の大雪で、B村からK町に通ずる路の交通は常に杜絶勝ちであつた。祖母が危篤だといふ電報が、雪の爲に二週間も後れてきた事もあつた。この冬も運材の爲に山中に忙しい日を送つた。

(十六) 六月の初め俺は徴兵検査のため、三年振りで歸省の旅に就いた。東京に三日を費し、郷里の停車場に兄弟や友人に迎へられて吾が家に入り健かな父母に逢ふ一家團圓の真事の卓に就いた時、どんなに嬉しかつたでせう。それから三日にして懐しくもなつたし、母校を訪ね、校長先生初め諸先生に逢ひ、ありと昔の事共思ひ浮べつ、廊下から庭から苗圃から歩き廻つて見た、廊下の一枚の板にも、庭の一石にも一樹にも皆懐しき細の思ひ出があつた、こうした時の俺の心の中は此の拙ないおれの筆ではどうしても書き現すことが出来ない。検査の結果は見事歩兵甲種に合格し、抽籤の結果も秋に入營と決したおれは嬉んで再び北上の途に就いた。

(十七) 其の後今日に至るまで、君はなせ一年志願をしなければかかると聞かれることがあるけれども、それには相當の理由がある、國民の尊い義務を捨て取て志願をする事はおれには出来ない藝當だおれはこゝまで國民の義務忠を實に果す積りで現役兵として入營した。おれに一年志願に將校となりたものは用兵の術が下手なので日露の戦争でも恐ろしく部下を殺したといふ事を或人から聞いておれは益々志願が嫌になつた或る場合には一人の將校よりも一人の兵卒の方が役に立つ場合があるに違ひないおれはその時の兵卒にならうと思つたからだ。

其の實行に出張する事になつた、B林道と云へば、工事の至難であつた事四邊の風光絶佳である事及び軌道が非常に危険な川邊を通つて居る運材には多大の危険が伴ふといふので管内でも有名な林道であつた、石が落ちて來て保線工夫の頭を傷つてたり、「ドロ」が脱線してその反動で乗つて居た人が絶壁の上から谷底に振り出されて死んだ又傷付いたりするものが年に幾回もあつた前年一人の死亡者と六人の負傷者を出したその様に危険な處は僅かに一里半位の處處ではあるがその間の景色といつたら全く他に於て見る事の出来ないものだ、牛が寝ソベツタやうな岩石や虎のろをふるて居るやうな岩石や、城壁の様に切り立つた岩石や鉈削をしたやうな岩石や塔のやうに突出つたものや大砲の様に突出したものやその他いろいろな形した岩石で包まれしかもそこには枝ぶりのいい、樹木が澤山ある山腹が兩側から狭く狭く狭く狭く狭く、その間を玉川の清流が瀬となり淵となりして流れて居るその川には又奇岩が澤山あつたり、川邊には大きな洞空があつたり、相内澤といふ澤には大きな瀧がか、つたりして居てその景色も到底おれの拙ない筆では書き表す事は出来ないこの間を軌道は橋を架けてトンネルを掘り左に行き右に移りして川から十丈も高い山腹を通つて居る、盛夏の折に瀧壺の處へ行つて居れば決して夏といふものを覺われない、その瀧が又層樹の茂りの間から下

ウ〜と落ちて居て瀧壺へは樂に行かれる
けれども瀧の上へは切り立つたやうな岩石
で未だ嘗て行つて見た人がないと云はれて
居る、秋になると一倍、紅葉を見せる危
険の多い林道ですから、へ出で働くと
ふものは至つて少なくてこれには一番閉口
した物價の安い時分であつたけれども運材
の方は、日に二圓以上もやらないければ承知
しなかつた、此林道の中間に夏瀬といふ温
泉があつて夏は澤山の浴客が居た、浴槽が
天然の岩石に掘り込んで作つたもので一寸
他では見られないものであつた
俺が出張して来て一週間目に「トロ」が脱線
してその反動で乗つて居た男が高い絶壁の
上から川の中へ振り落されて即死をうけた
その時おれは土場で検尺に従事して居たが
急報に接して現場に馳せつけて見ると、急
勾配のしかも半程の短いカーブの場處でト
ロはカーブを切つて行く事が出来ず、外側
に飛び出し積んで来た丸太の鼻先を山腹
に突きにじつて居た。その男の辨當を包ん
だ包みがそのまゝ、主人持ち顔に丸太の上
に結び付けられたのを見ると悲しい気分
になつた。川は前夜の雨で濁つて居たので
死体を捜すに困難したけれどもその夕方に
なつて漸く捜し出す事が出来た。死体を土
場に運んで青ごめたるの死人の顔を見入つ
た時初めて死の莊嚴といふものを感じた。
此の男も自分の職に斃れたのだ軍人が戦場
で戦ひ死すると同一だ、彼れはあの勾配の

あのカーブに差ししかつた時に如何に最善
の努力をつくした事でせう、死の間まで
彼れは最緊張した努力を續けたに相違ない
然しながら彼れは最早ない、尊い人生の闘
ひに闘ひ死んだのである、おれは死者の前
に瞑目久しくした翌日故人の妻と兄とはや
つて来て死者の前に泣きむせむを見た時誰
れでももらい泣きの涙をどよめる事が出来
なかつた。
(十八)

五林學士にあい、市中を見て歸つて来た
(十九)
入營の期日がだん／＼迫つて来た。最初は
早く暇をもらつて故郷まで徒歩で踏破して
やるつもりで居たのに受持つた仕事の都合
で漸く十一月に入つてから暇をとる事が出
来たのでこの計畫はダメになつて仕舞つた
十一月十一日に愈々二年半奮闘の跡を捨て
て歸國の旅に就いた。今上陸下の即位の大
禮のあつた頃であつたので行く處皆瑞氣に
満たされて居た。十一月十九日萬歳の聲に
送られて勇みに勇み入營の途に就いた、何
事も捨て果て、胸中召國家あるのみだ歐洲
戦争が何時終るやら見立もつかず、帝國の
歐洲出兵を唱ふるものがあつた位だったので
我達の若い胸の中には益々熱い血汐が漲つ
て居た。
(二十)

苦しいには相違ないけれども軍隊生活程愉
快なものはないおれの一生の中で何れの時
代が一番思ひ出が多いと云へば學校に居た
時より寧ろ反つて軍隊生活の二年に指を屈
する地獄の様にいやがられて居るけれども
それは誤解だと信する、軍規同規か面倒だ
演習が骨だといつても自分に充分の義務職
性の感念があれば何も辛いものでもない
事はない、寧ろ大きい修養の時期であるお
れには二年の中に煙草と酒を一切やめて仕
舞つて、今日でも一切用ひない、間食の悪
習もすつかり無くなつた、除隊後再び林區

署に入つて官舎生活を續けて居る時に自炊
しつ、忙しさで闘ひ暑さ寒さと闘ひ來つた
も要するに軍隊生活の賜だ一年志願して得
た位置よりもおれにはこふ云ふい、結果を
もたらして居る
(二十一)

入營した年の翌年九月には山東への守備隊
に編入され工渡支する事になつた青島に七
ヶ月濟南に五ヶ月暮さず寒さに耐へつ、苦
しい守備勤務に服した字品の港を出帆して
次第に遠ざかり行く故國を上甲板に見送る
幾多の勇士の胸には等しく名状し難い感慨
を以て滿される玄海灘の波濤を乗り切つて
幾日目に青島市街を海上から望み得た時の
喜び白雲の大家高樓が緑樹の間に隠見し、
ビスヌークモルトグの諸砲臺が四邊を壓し
て居る態々獨逸が二億の資金を投じ小伯林
の建設を夢み東洋政策の根據地たらしめん
とした青島結構と稱せずして何と云ふに
やう俺達は上陸後市街の東北ビスヌーク山麓
のビスヌーク兵舎に駐屯して九月から翌年
の四月の初めまで居たビスヌークモルトグ
イルチスの諸砲臺初め地山中央臺東鎮海岸
の諸堡壘や鐵條網などをそのまゝに存在し日
獨戦争の跡をしのぶには充分であつた殊に
静岡や濱松の聯隊から行つた將校の中には
日獨戦争に参加したものが居て實地に就い
て戦争の話しを聞かれる時は全く骨鳴り血
湧の思ひがした濱松聯隊の一中尉がボンブ
樹の占領に部下小隊の大部分を殺して漸く

目的を達する事が出来た時の部下をいたん
る中尉の真情を吐瀝した話しは今尙耳新ら
しく耳底に残つて居る青島は海岸ではある
が冬季日非上に雨が少なくて二三月頃になる
と山火事がしきりに起つて毎日のやうに火災
呼集て引き張り出されたものだその中に林
務署の方から巡視の手が少なくて充分火災
を豫防する事が出来ないから守備隊から巡
察の兵隊を出してくれと云ふてきたので各
中隊から幾組の巡察が出て警戒する事にな
つたおれの中隊にはおれに山に對する經驗
があるから廻つて歩けといふので二人の部
をつれて受持ち區域たる町の中央にある八
幡山を歩き廻つた支那は一帶に禿山が大部
分であるけれども青島市街附近租借地一圓
立つ様な森林になつて居る獨人の手に入つ
てから七十萬圓からの費用を投じて植林し
たさうで立つたばななものになつて居る貴重
な樹種は見なかつたけれどもニセアカシヤ
馬松赤松の類が大部分でイルチス砲臺の方
には柴や檜も若干あるやうで丁六六年の四
月には青島から百里程西北にある濟南府に
轉じて守備する事になつたそこは山東省の
首府ともいふ可き都會で支那といふものが
俺達に充分にしみ込んだのはここへ來てか
らだ孔子の墓のある曲阜も濟南からは余り
遠くはなかつた望河も三里半の處を流れて
居るよ／＼こへは行軍に行つた張勳が復辟
を告言したのも濟南に居る頃で新聞の號外
の切り抜きが日記帳に貼られてある守備の

二年間の勤務は無事に終つたおれは又お
れの目的に向つて運命を開拓しなければな
らない山を離れて森林を離れて存在の出来
ない俺達の山に屍をさらさねばならない大
正七年の一月父の六十二才の厄落しの祝ひ
濟んだ翌日雪の中を出發して舊住地へ向つ
たなつかしい山なつかしい川おれは第二の
故郷へでも歸つたやうな気がして嬉しさの
限りがなかつたN小林區署在勤を命ぜられ
て約三ヶ月の在勤の後保護區官舎の生活に
入つた此官舎生活約一年の間にはおれは非
常に得る處があつた担当有林の面積は僅
かに千五百町歩のものであつたけれども
學校に於て修めた學科の價値は此の時漸く
ハッキリ分かる様になつた此保護區員は位
置の最も低い官吏であつてしかも國有林野
の經營には最も密接な關係を有するもので
ある保護區員が完全なものであれば國有林
野の保護管理は實に易々たるものである即
ち國有林の状況を最も詳しく知つて居るも

のは保護區員より外にない状況の詳がな
のか適地に適樹を植付けてそして、保
護撫育の法を講じ又一方利用の方面から見
ても地方の状況に應じ適當の方法を執り保
護の点に於ても地方の状況に應じ盜伐の豫
止でも火災の豫防でも容易に行ふ事が出来
るいくら立派な施業案があつてもその實行
者が適當なものでなければ駄目である小林
區署長や大林區署員のため、の巡視も
の効果の上には真に針をついた穴位のもの
であらう保護區員の責任は實に重且つ大な
なりと謂ふ事が出来る然るに元來保護區員の
設備の至つて悪い常に山間僻地に住居して
精神的にも肉体的にもその労働は實にはげ
しいものである官吏とは云ひながら一種の
筋肉的労働に等しい然るにその得る處は眞
にあはれなものである今でこそ改正せられ
て増額にもなつてせうが一二年前までは
保護區員の俸給は十二圓より三十圓までと
云ふ實に貧弱なものであつたこんなことで
國有林野の經營に最も必要な處の官吏と
いふ美名を冠せられた労働者の質のいゝも
のを得らるゝかどうか物價騰貴につれて生
活の壓迫を蒙る様になつてから収入の増加
を要求するものは官吏の中にも澤山あつた
否なそれは表面に表はれないだけで官吏の
すべてがそうであつたに相違ない保護區員
のみは地方に散在して居るため團結の機會
もなく従つて収入の増加を要求する術もな
くよく陰忍して今日に及んで居る當局はこ

れらの忠勤者に向つて充分の感謝の辭を捧
げてはどうか、此の官舎生活を書けば澤山
の材料はあるけれども、それは別に「過去帳」
を作る事にして茲には見合せ住様と思ふが
尙此の様と思ふが尙左の一篇を書き附して
筆を置く。
(二十四)

大正九年此の年はおれの身にしては随分の
變動のあつた年と云はねばならない即ち多
年の官界生活より民業に入り獨身生活を捨
て、家庭生活に入つた年なのであるお役人
生活は俺の一生を終る處でない俺の使命は
たしかに外にある機會があつたらお役人を
やめやうと思つて居る處今年の四月になつ
て〇〇商會に入らないかと誘つてくれる人
があつたので丁度財界動搖の初めで反對す
るものが澤山あつたけれどもおれは斷々乎
としてお役人生活を捨て、仕舞つた此處に
入つたのも俺の眞の目的ではない目的に達
する道程である準備であるお役人をやつて
居るより此の方が目的に達し易いつまり俺
は俺の目的に向つて一步を進めたいといふ
だけだ利益に走るのではないかと誤解した人
もあつたが物貨上に於ては決してお役人を
やつて居るより上等ではない。けれども俺
は愉快だ前途には大きな光明が認められる
妻は心から俺を助けてくれる。働かうと
今朝早くから晩おろく迄。(九、九、一一)

惠那登山

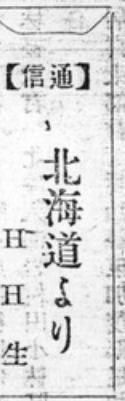
口籠 まで 溪 月生

十月九、十、十一の三日間惠那郡中環町宗
泉寺に於ける、修養團惠那郡支部の講習會
に出席して居た私は十日の惠那登山に參加
した。寒身に沁む未明の午前五時、眞裸体
で庭で國民体操をなす。
中津川二帯の平地、灰色の夜の静寂さがま
だ凡ての物を蔽つて居た。弱々しくも光り
くらして居た小さな星が一つ、空の荒寒
たる深みに消え去つた。白い電燈の光が、
未だ夢まごらかな人々の樂園を守つて居る
様だ。附近農家の鶏が我等の叫びに、オイラ
の領分へ侵入したな、何と云ふ様、一生
懸命うたひ出した。寺の裏の暗い竹藪で夢
を――舌切雀のことも――破られた雀が
眠い目をこすつてチユ、と騒ぎ出す。團
旗を先頭に、一班から十班まで順々に、勇
み立つた輕裝が約二百、門を出たのは六時
十五分であつた。快く晴れた空、清爽な朝
の空氣、旭光の色、――はも切れさうだ。
中央製紙會社の前を通る。偉大な建物が谷
一側に連つて、高い黒い煙突から眞黒な烟
がムク、と魔の様に匍ひ上つて居る。エ
ンジンの物凄いや一種の唸りが硝子窓をガタ
と振はせて、青黒い水が地獄の苦から
解放された如く走つて出る。
五町を進めて右に片ヶの奇岩に接す。奔

流の速に牛の歩むが如く、川底に光る小石
の色透くあたり、ろろ神境に入る感あり
だ。谷急に狭くなつた處斷崖水に迫つて、
只麓を崎嶇たる道が通つて居る。昔こ、に
大なる岩あり、流る、水のまにまに轟き鳴
つたと云ふ事で、いづ云ふと無く此の鳴岩
の稱が出来たものと言ひ傳へて居るさうで
ある。
會社の木材輸送用軌道に沿つて約二里で前
宮に達した。前宮は頂上七社の祭神九柱の
大神を奉祀してあるさうだ。
新しい友とも舊知の如く語る。君の――
父も兄も二十九才に子供を残して亡くなら
れたる悲哀、家庭の現在と、若き血に燃え
立つ君の胸――に涙ぐむだ。自分はあまり
深く語り得なかつた、逆境に於ける奮闘な
ど相勵ます、君よ幸あれ。

口惠 那 山

惠那嶽一名覆舟山と云ふ胞衣山に作る、當
國中第一の高山にして郡名は之より起ると
ぞ、中津川町より四里東北の麓は信濃國西
筑摩郡の湯舟澤に接す、信濃にては野熊山
と稱せり、神代の時に天照皇大神の御胞衣
を北山に納めたるを以て此稱あり、故に伊
勢大廟大麻の眞木及社材は廿一年毎に此山
中より伐り出して伊勢に獻す、これ上古よ
りの遺風なりと云ふ、頂上に惠那神社あり
式内郷社にして伊弉諾命、伊弉册命、天照
皇大神、豐受大神、一言主命、木花鐵耶姬
命、速玉男命、天目一箇命、猿田彦命を祭



【信通】 北海道より
H H 生

る、創立の年月詳ならず毎年九月廿八日を
以て祭典を擧ぐ、社境高峻の地にあるを以
眺望佳なり。(日本名所地誌より) つづく
蘇校が呱呱の聲を擧げてから茲に貳拾週年
を迎へたと言ふ記事が去る頃の林友紙上に
依つて發表照介せられまして誠に觀喜に堪
へぬ次第で有る、讀つて第一回より第十七
回に亘る五百五十餘名の卒業生諸氏は日本
全口は愚か遠く海外に迄發表せられて居る
のは誠に心強いので有る、本道にも多數の
卒業生が各地到る所に活動せられて時折は
出會して壞舊談に花を咲かせるので有る
現在道靈の施業林には南校長安藤先生を初
めとして數名の同窓が祖を並べて居る
吾々は春未だ札幌の人々が花に酔ふて居る
時既に鳥も通はぬ人跡未踏の原生林に於て
野宿に野宿を重ねて半歳に亘る長期の天幕
生活を續けるので有る
此の様な生活を繰返して札幌に引揚げる頃
は全く冬枯のしたアカシヤの都と化して居
るのである、去る頃も安藤先生が施業案監
督として吾々の天幕を訪れて下さいまして
本年卒業のY君と三人で爐を圍んで快談に
時を移したので有る

樵 夫

翠 園 山人

わたしや未曾谷二十の樵夫
虫も鳴かない淋しい夕べ
赤い紅葉にそ、のかかれて
山が戀しうてならないま、に
裏の稲穂が涙にくれて
袖にすがつて止むるもさかす
いとしい故郷に別れて後は
晝はひねもち夜は夜もすがら
あちらこちらと山かけ廻り
夢の如くに三年は過ぎぬ
花が咲かうが木の葉が散るが
そんな事には頓着なしに